

早稲田大学米式蹴球部のパスオフェンスが各大学の
ディフェンスに与える有効性

Effectiveness of the Passing Offence in Waseda univ. Football Team that effect
the Defense of the others college

1K08A186-9

広野 公大

主査 岡 浩一朗 先生

副査 鳥居 俊 先生

【目的】

アメリカンフットボールとは激しい身体活動が目につくが、緻密な戦略や周到な準備がなければ勝利することはできないと言われている。相手チームの特徴や、傾向を数値化したものを頭に入れ、またその特徴や傾向をもとに自分たちのオフェンスのプレーを新しく作ることや、もともとあるプレーにも調整を加えなければならない。早稲田大学米式蹴球部ではこのような準備というものを特に意識して取り組んでいる。本研究では、その中でも特に細かなプレーの調整が必要で、新しいプレーも多種多様に展開できる「パスオフェンス」に特化して各大学の対戦するディフェンスがどのようなパスディフェンスをしてきて、それに対して早稲田大学がどのようなパスオフェンスを準備したか、またその結果における関連性や有効なパスオフェンスを分析し、競技力の向上につなげていく。

【方法】

この研究は早稲田大学米式蹴球部の協力のもとに行った。2011年度の関東大学アメリカンフットボール1部リーグにおける早稲田大学が行った全7試合で早稲田大学米式蹴球部のオフェンスチームが用意したスカウティングデータをもとに、対戦相手ごと（東海大学、日本体育大学、専修大学、関東学院大学、国士舘大学、明治大学、日本大学）に作成したゲームプランがどのような有効性を発揮し、どのような結果を得られることができたのかを、試合の結果と、試合をビデオに収め、それを見ながら作成するもので、試合のデータを表にあらわしたスタッツというものを見て、パス成功率や、パスの獲得ヤードから実際に事前にたてたゲームプランが有効だったのかを考察し、またどのようなゲームプランをたてたら良かったのかを考察する。その基準となるものは早稲田大学米式蹴球部できめた Pass 成功率 60% を越えているもの、また、Pass 獲得ヤード

が 200 ヤードを越えた試合が事前のスカウティングが有効ととらえる。なぜ、達成できなかったか、どうしたら達成できたのかというところをデータから考察する。

【結果】

スカウティングレポートや、ゲームプランを作成し、それを実践できた試合は確実にパスの成功率が上がっている。60%の成功率を切っている試合は全部で4試合であったが、これらの試合でスカウティング レポートにそって作ったプレーを展開している場合はそのプレーは成功し、ディフェンスをコントロールできていたと言える。相手の特徴を細かくつかみ、ディフェンスを把握するという、早稲田大学米式蹴球部が今までおこなってきたスカウティングの作業でパス成功率は向上することが証明できた。しかし、それだけでは勝利に辿りつかないことも判明している。

【結論】

スカウティングというものは非常に重要なものであるということが判断できる。しかし、自分たちが用意したプレーを消化不良にならないことや、正確にフィールドで表現できるまでの練習時間を考えて準備することが必要だろう。準備したプレーは秋シーズンを通してどのディフェンスに対しても機能していた。これからは、その準備したプレーをいかに正確に、いかに有効なタイミングでコール出来るかの分析までしなくてはならず、上記した通り、準備の質という部分でパスプレー全体を考えて準備しなくてはならない。そのためにはスカウティングレポートにディフェンスラインの項目を増やすことや、他の対戦相手が何回プレッシャーを受けて投げ捨てたのか、どのようなディフェンスをされたときにパスが決まっていなかったのかという分析までしなくてはならないと考える。